馬と生きる

岩手県八幡平市に、世界でも例のない取り組みをしている農場がある。
「ジオファーム八幡平」だ。
競馬を引退した馬を引き取り、その馬ふん堆肥と地熱を使ってマッシュルームを育てる。
循環型農業として注目を集めているが、その根底には馬とともに人生を歩んできた農場主の深い愛があった。

船橋 慶延さん、友紀恵さん、友希那（ゆきな）ちゃん、慶歌（よしか）ちゃん。

岩手山の麓にあるジオファーム八幡平。約50頭の馬の飼育とマッシュルーム栽培によって循環農業を実現している。

現役の馬術競技選手でもある船橋さん。仕事の合間を見て練習に取り組む。

船橋慶延さん。ウマ愛でここまで突っ走ってきた。

朝夕の冷え込みがぐっと厳しくなる、10月上旬。白々と夜が明け始める朝5時半から、「ジオファーム八幡平」の1日が始まる。この農場を営む船橋慶延(よしのぶ)さん(40)は、朝一番に餌の準備に取り掛かる。一つひとつ馬房を巡り、馬たちの首や背に触れながら言葉をかける。その様子は、我が子を慈しむ親の姿に重なる。時に優しく、時に厳しく、その子に合ったやり方で本来持っている能力を引き出していく。

「馬って一頭一頭みんな個性が違うから、ほんとに面白いし、愛おしい。僕にとって馬は、友だちでもあるし、パートナーでもあるし、家族以上でもある。うまく言えないんですけど」と、船橋さんは笑う。朝7時。スタッフが集まり出し、農場はがぜん賑やかになる。広々とした馬場の向こうには、今日も岩手山が美しい姿を見せている。

引退馬が生きていける場所をつくりたい

船橋さんは大阪出身。長年、馬術競技や馬の育成に携わってきたが、ここ八幡平で農場を開いたのは競走馬を退いた馬たちの7〜8割はその後の行き場がなく、屠畜という運命が待っていることに心を痛めてきたからだ。

馬の平均寿命は、20〜30歳といわれる。競馬界では毎年7000頭もの子馬が誕生する一方、競走馬として現役を続けられる期間は長くない。餌など飼育にかかる莫大なコストと、受け入れる施設の限界という現実の中、競走馬としての価値がなくなった馬が余生を過ごせる環境というのはほとんどないのである。

飼育費用をまかない、安心して暮らせる仕組みをつくる。その鍵が、マッシュルーム。2015年1月に創業したジオファーム八幡平は、この解決を目指した日本でも、いや世界でも類を見ない農場である。

愛馬カブキとの出会い

馬は長寿な動物。環境が許せば30歳近くまで生きる馬もいるそうだ。

マッシュルームの栽培ハウス。現在4棟で生産を行なっている。

船橋さんが初めて馬と出会ったのは、5歳の時。ポニー園での引き馬体験が楽しくて、「もう一回、もう一回」と何度も母親にねだっては、夢中で馬を引いたという。中学2年生の時に乗馬を始め、たまたま手に入れた10万円で一人北海道に渡り、馬産地を巡る旅をした。高校生になると週末に栃木県の「那須トレーニングファーム」に通い、馬術の「障害飛越(ちょうがいひえつ)競技」に取り組むようになったという。

「今考えれば、よく両親は中学生だった僕を一人で北海道に行かせてくれたり、那須に通わせてくれたなと思うんです」。馬に真剣に向き合う息子の姿を見て、思うところがあったのだろう。高校3年生の時、両親は1頭のサラブレッドをプレゼントしてくれた。それ以降、競技生活での相棒となり、人生を共に歩んだ愛馬「偉大歌舞伎(グレイトカブキ)」である。

馬術競技にのめり込んだ船橋さんは、大学に通いながらアルバイトを掛け持ちし、卒業後は運送会社で働きながら那須でのトレーニングに通った。カブキと一緒にオリンピックに出場